

保幼小連携にむけた絵本の活用
—「主体的・対話的で深い学び」を目指して—

近 藤 章

Utilization of picture book for preschool and elementary school
—Aiming to lead to Active learning—

Akira Kondo

豊岡短期大学 論集
第 14 号 別冊
平成 30 年 2 月 28 日 発行

保幼小連携にむけた絵本の活用

—「主体的・対話的で深い学び」を目指して—

Utilization of picture book for preschool and elementary school

—Aiming to lead to Active learning—

近藤 章

Akira Kondo

はじめに

近年、全国の小学校で、授業が成立しない「小1プロブレム」と呼ばれる現象が問題になっている。これまでも幼稚園・保育所と小学校の連携強化など、子どもたちの小学校生活への円滑な移行のための取り組みが進められてきた。小学校以降の学びを豊かにする上でも、この時期の教育は今後ますます重要になると思われる。平成30年4月1日より施行される学習指導要領においても保幼小連携の推進が挙げられている。

教育の目的は「子どもの育ち」や「学び」を促進し、子ども達の成長を支援することであり連携を取り合うことは理の当然である。就学前教育と小学校教育の間には、発達と学びの連続性が成り立っている。

しかし、実際の教育課程や指導方法は学校種の違いが極めて大きい。幼児教育の保育と小学校教育の授業の指導の仕方の違いによるところである。幼児教育で小学校のやり方を取り入れるとか、小学校側で幼児教育のやり方を導入するというのではない。段差は階段のように一段ずつ上がっていくものであり、どの時期の移行の間にも段差はある。ただ、それが大きすぎると、子どもが脱落しかねないし、教師の指導の負担が大きくなる。

本論においては、保幼小連携の在り方を領域「言語」での小学校国語科学習用語に着目し考察する。

第1. 保育園、幼稚園、小学校の連携について

1 子どもの発達や学びの連続性

保育所や幼稚園等から義務教育段階へと子どもの発達や学びは連続している。

保育所や幼稚園等で行われている幼児期の教育は、義務教育及びその後の教育の基礎を培うもの

であり、幼児期の発達の特性に照らして幼児の自発的な活動としての遊びを重要な学習として位置づけ、保育課程や教育課程を編成し、教師や保育士が意図的・計画的な指導を環境を通して行っている。

遊びを通して身体感覚を伴う多様な活動を経験することによって、豊かな感性を養うとともに、生涯にわたる学習意欲や学習態度の基礎となる好奇心や探究心を培い、また、小学校以降における教科の内容等について実感を伴って深く理解できることにつながる学習の芽生えを育てている。

このような特質を有する幼児期の教育は、子どもの内面に働き掛け、一人ひとりのもつ良さや可能性を見だし、その芽を伸ばすことをねらいとしている。従って、幼児期の教育は、目先の結果のみを期待しているのではなく、生涯にわたる学習の基礎を作ること、後伸びする力を培うことを重視しているといえる。

2 絵本の読み聞かせ

子どもの発達や学びは連続しており、保育所や幼稚園等で行われている幼児期の教育は、義務教育及びその後の教育の基礎を培うものであり、幼児期の発達の特性に照らして幼児の自発的な活動としての「遊び」を重要な学習として位置づけ、保育課程や教育課程を編成し、教師や保育士が意図的・計画的な指導を「環境を通して」行っている。

絵本の読み聞かせの意義および絵本と保育のかかわりについては、『幼稚園教育要領』（以下「要領」）と『保育所保育指針』（以下「指針」）で領域「言葉」や「表現」での「ねらい」と「内容」が、以下のように発達段階に沿ってまとめられている。

【ねらい】	【内容】
・物的環境としての絵本の興味	・絵本を見て興味をもつ
・絵本そのものの内容への興味・関心	・言葉の模倣や繰り返しを楽しむ
・絵本を通して想像力を豊かにする	・絵本からイメージを広げる
	・絵本の内容から想像することを楽しむ ¹⁾

一方、「要領」では、「日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる」と示されている。

幼稚園で絵本を読むことのねらいは、絵本に興味をもつようになる、言葉の美しさに気づく、絵本を通しての楽しい体験、想像力を育てることなど、「絵本への興味」「言葉の美しさ」「楽しい体験」「想像力」に注目されている。

保育の場ならではの絵本の読み聞かせの意義は、①保育者（読み手）と子どもたち（聞き手）の安定した信頼関係の上に積み重ねられる共有体験であること、②絵本と子どもの生活の連続性が可能となる読み聞かせであることだと考えられている。

一方、小学校義務教育は、時間割に基づき各教科等の内容を年間や単元の指導計画の下で教科書

などの教材を用いて指導している。

物語文を正確に読み取るとは、作品の設定や人物像、起こった事件などの内容を理解し、根拠に基づいた読み取りができることである。遊びを中心とした幼児期の教育と教科等の学習を中心とする小学校教育では教育内容や指導方法が異なっているものの、幼児期の教育と小学校教育とは円滑に接続されていることが望まれる。保育所や幼稚園等と小学校との間で幼児児童の実態や指導方法等について理解を深め、広い視野に立って幼児児童に対する一貫性のある教育を相互に協力し連携することが必要である。

第2. 小学校国語科の学習

1. 学習指導要領授業改善のキーワード

「主体的・対話的で深い学び」(=「アクティブ・ラーニング」の視点)

今回の改定は、情報化やグローバル化など急激な社会的変化の中でも、未来の創り手となるために必要な資質・能力を確実に備えることのできる学校教育を実現する目標がある。

これからの時代に求められる知識や力とは何かを明確にし、授業改善の視点(「アクティブ・ラーニングの視点」)を明確にすることが重要であるとし、これにより、教科の特質に応じた深い学びと、学校教育における質の高い学びを実現し、能動的(アクティブ)に学び続けることできるとしている。

答申では授業改善の視点として次の3つを示している。

・「主体的な学び」

学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。

・「対話的な学び」

子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。

・「深い学び」

習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。²⁾

2. 小学校国語科の学習 読むこと(物語文)

国語科の学習指導要領において、低学年「読むこと」の目標は、「書かれている事柄の順序や場面の様子などに気付いたり、想像を広げたりしながら読む能力を身につけさせるとともに、楽しんで読

書しようとする態度を育てる。」³⁾とある。さらに、物語文に関連する指導事項は、「場面の様子について、登場人物の行動を中心に、想像を広げながら読むこと」⁴⁾とある。

物語を読むためには、場所や時間、登場人物の性格や行動など、基本的な構成要素を理解することが必要である。そして、そのような構成要素をもとに、場面の様子を豊かに想像するためには、子どもから多様な考えを引きだし、交流することが有効であると考えられる。

物語は通常複数の場面によって構成され、展開に即して時間や場所、周囲の風景、登場人物などの様子に変化しながら描かれている。場面の様子に着目するとは、登場人物の行動を具体的に想像する上で、物語の中のどの場面のどのような様子と結び付けて読むかを明らかにすることである。

着目した場面の様子などの叙述を基に、主人公などの登場人物について、何をしたのか、どのような表情・口調・様子だったのかなどを具体的にイメージしたり、行動の理由を想像したりすることをおして、第3学年及び第4学年、第5学年及び第6学年の指導事項を経て、中学校第1学年の指導事項の「内容を解釈すること」へと発展へと指導の継続を図っている。

作品の解釈には正解がないということから、自分なりにわかればよいとするところがある。その結果、自分なりの読み方ができればそれでよいと考える。読者によって様々ならえ方ができるのが物語文の特徴である。読者による様々ならえ方があってよい。確かに作品に触発され、いろいろな思いを抱くというのは文学を読む楽しさである。しかし、その読み方はたいいていの場合、読者がよく知っているようなことを読んでいるのである。自分が自由に読みとってよいと思えば、自分の読み方は違うかもしれないとか、もっと違ったことが書かれているのかもしれないとは思えない。さらに作品を読み続ける動機は生まれないことになる。

深い学びの鍵は、主体的に見方・考え方を働かせることである。見方・考え方とは、どのような視点で物事を捉えるかが重要であり、共通のものさしである学習用語を定義し、学習用語を用いることで共通の視点で読みを深めることができる。また、学習によって得た読みの方法を、子ども自身が他の作品の読みに生かすことができる力として発展させていくことができる。

子どもたちが「自力読み」の観点として学習用語を活用して読解し、自らの考えの根拠を基に対話を行えば、主体的に文章を読解する力を身に付けることができる。作者が物語を通して、読者に伝えたいメッセージ、作品の中心となる主題を読み取ることである。

表 - 1 対話の視点としての学習用語 (ものさし)

	学習用語 (定義)	関連する用語 (定義)
一 ・ 二 年	題名…書物や作品の題 作者…作品を作った人 昔話…以前の出来事・経験などの話 人物 順序…何が先で、何があとに来るか	登場人物 会話文 出来事 オノマトペ…ものの音や声などをまねた音 リフレイン…くり返し

三・四年	場面…物事が行われているその場のようす 登場人物…人間のように思ったり行動したりする人物のこと 場面の移り変わり 感想の交流 人物の性格	中心人物…中心となる重要な人物、主役 対人物…中心人物に影響を与える人物 対比…二つのものを並べ合わせて、違いを比べること 視点…誰の目を通して描かれているか、作者が作った物語を話す人。読み手が理解しやすいように物語を説明する役目
五・六年	心情 情景 視点 筆者の意図 山場	主題…作者が物語を通して、読者に伝えたいメッセージ クライマックス…中心人物の考えががらりと変わったところ。山場の中の最高潮の部分 象徴…シンボル。題の裏に隠されたもの 伏線…作者の仕掛け

3. 学習用語活用した読み（題名と主題に着目した）

(1) 物語の題名に関する学習用語

物語の題は、表-2のように分類することができる。物語の題名は、主題に結びつくものが多い。光村図書小学校国語科教科書、読むこと一覽では、合計62教材が扱われている。登場人物が題名についているものは、低学年、56% 中学 21% 高学年 8%と学年が進むにつれ、少なくなっていく。

表-2 題名の分類

学 習 用 語		説 明 と 絵 本 の 題 名
①登場人物		その作品の登場人物（多くは主役）の名前がそのまま題となっているもの。「ごんぎつね」「はらぺこあおむし」
②象徴		何かを象徴していたり、比喻していたりするものが題になっているもの。「お手紙」「一つの花」「わらぐつの中の神様」
クライマックス	③事件	その作品のクライマックスに関連したことが題になっているもの。起承転結の転にあたる。「つり橋わたれ」「手ぶくろを買いに」「どろんこ祭り」
	④地名、場所	場所、地名が題になっているもの。「三年とうげ」「かちかちやま」
	⑤時	時刻や季節などが題になっているもの。「あらしの夜に」

(ア) 登場人物が題名についているもの

「大造じいさんとガン」では、作者は、自分の感情を語らない野性のガンとして残雪を登場させている。この作品で中心人物は、大造じいさんである。野性のガン残雪と関わっていく中で、彼自身どのように変わっていくのかということを追っていくことが大切である。

(イ) 象徴と題名となっているもの

象徴が題となっているものに、「お手紙」がある。

一通の手紙を通して、かえるくんとがまくんの心の触れあい、友情の絆がさらに深まっていく様子を描いた作品である。かえるくんの書いた手紙は、どんな内容の手紙なのかを読むことで、作者が読み手に伝えたい内容がダイレクトで分かる。

その題の裏に隠されたものが何を象徴しているのか、比喩を使うことで何が強調されるのかを読み取る。題が象徴的な作品では、その題が何を象徴しているかを考えることをメインとし読み取る。

(ウ) クライマックス (事件) が題名となっているもの

「手袋を買いに」は、子狐の手にあう毛糸の手袋を買ってやろうと町へ出かけたが、母狐は、しかたなくひとりで町へ行かす。片手を人間の子供の手に変え、人間の手のほうを差し出して、この手にちょうどいい手袋ちょうだいと言うように言い聞かせるが、子狐は反対の手を出してしまう。クライマックスである手袋を買う前と後ではいきつねの親子の気持ちが大きく変わっている。

(エ) クライマックス (地名) が題名となっているもの

地名が題についているものに「三年とうげ」がある。

「三年とうげ」には、そこで転んだら、三年しか生きられないという言い伝えがあった。おじいさんが、転んでしまい寝込んでしまった。一度ころべば三年生きられるなら何度も転べば長生きできると、おじいさんは元気を取り戻した。

物語の起こった場所、三年とうげが題についている。ここで同のような事件が起こり、登場人物の気持ちが大きく変わったのか、物語のクライマックスがあった場所が題名についている。

(オ) クライマックス (時) が題名となっているもの

あらしの夜にどんな出来事があったのかを読み取ることで、物語の主題を考えることができる。

このクライマックス (時) は、表 - 2③のクライマックスで起きた出来事、表 - 2④の「さんねんとうげ」のようにクライマックスが起こった地名が題についているものと同様で、クライマックス一つにまとめることもできる。

読み方の方法を発達段階に応じた学習用語を示し、学習者にとって生きてはたらく用語にしていく。物語文を読む技を身につけ、再生・変形・蓄積を繰り返すことにより、主体的な学びへととなっていく。一人読みの段階＝主体的な学びができ、互いの読みを比較する読みの交流段階＝対話的な学びから、自らの読みを再考して交流で得た深まりを類別して評価する読みの振り返り段階＝深い学びとつながる。

(2) 学習用語

(ア) リフレインについて

小学校国語科1年に掲載されている「おおきなかぶ」は、繰り返しの文が多く出てくる。同じことが繰り返されているので、子どもたちもその繰り返しのおもしろさを楽しみながら読んでいる。「け

れども、かぶはぬけません。」「それでも、かぶはぬけません。」「やっぱり、かぶはぬけません。」「まだまだ、かぶはぬけません。」「なかなか、かぶはぬけません。」や「うんとこしょ、どっこいしょ。」の掛け声が繰り返されている。おじいさん、おばあさん、まご、いぬ、ねこ、ねずみと、「〇〇は△△をよんできました。」という文型が繰り返され、次はどうなるのかと楽しく想像させることができる。

(イ) 伏線について

伏線とは事実、行動、人、出来事など、将来の動きを暗示するもののことである。小学校5年生の国語教科書にある、杉みき子の「わらぐつの中の神様」では、雪国に暮らす女の子が、雪が積もっているのでわらぐつを履くように言われ、祖母からわらぐつにまつわるあたたかい話を聞くことになる。この話の場合、冒頭でわらぐつを履くのをなぜ嫌がったということが伏線であり、冒頭のシーンで祖父がお風呂に出かけて不在であるということも伏線である。祖母の話が終わるころまで、わらぐつを履くのを嫌がっていたが祖母の話の聞き手になったことやその間の祖父の不在と、女の子の気持ちのとのつながりを見つけることが「わらぐつの中の神様」を意味づけることになる。

(ウ) 対比について

対比とは、二つのものを並べ合わせて、違いやそれぞれの特性を比べること。二つの性質あるいは量の違ったものを並べると、その違いが著しくなる現象で、宮沢賢治「やまなし」では、五月と十二月の2枚の幻燈において、かわせみ⇄やまなし、朝⇄夜、春⇄冬等の対比という視点を提示することで、違いから言葉のもつイメージや隠された作者のイメージを想像することができる。

第2. 幼稚園教育要領と読書活動

1. 幼稚園教育要領と読書活動

小学校以降の学校教育における集団での読書は、話し合いを通して感じたり考えたりしたりしたことを聞く中で、その感じ方、考え方に同化したり、共感したり、修正したりしながら自らの考えを深めていき、自らの考えを確かなものしていくことである。学級集団において、子どもたちが互いに自分の問題を集団に出しあい、そこで、互いにその問題についての考えをつき合わせることである。

幼稚園教育指導要領の第2幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として、「(1)豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かったり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」(2)気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」(3)心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」⁴⁾と幼児の幼稚園修了時の具体的な姿であり、教師が指導を行う際に考慮するものを示している。

これらのことから、幼児教育における集団での読み聞かせは、協同の態度の芽生えを培い、やが

ては、共同思考への参加態度の変化へとつながる。保育者は協同の態度の芽生え、小学校教育の連携を意識して、読み聞かせる絵本を選択し、さらに表現や協同の態度へとつながるような働きかけが大切である。

2. 幼児の興味や関心を広げる指導

幼稚園教育要第2章ねらい及び内容言語では、「絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること。幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること。」⁴⁾とある。

絵本や物語などに、親しみ、興味をもって開き、想像する楽しさを味わうでは、家庭ではどちらかという自分の興味のあること中心に見たり、読んだりすることになるが、幼稚園では教師や友達の興味や関心にもふれるようになっていくとある。保護者からの話や家庭で読んだ絵本を記入する絵本カードなどから、家庭で、は幼児の興味や関心または親の好みによって、読まれる絵本の内容が偏る傾向もあると思われる。したがって、幼稚園や保育所では、絵本の領域を広げる工夫も必要である。

表-3 5領域の目標とキーワード

領域	目標	キーワード
健康	健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う	心 体 安全
人間関係	他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う	他の人 自立心 人との関わり
環境	周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う	環境 生活
言葉	経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う	自分なり表現 言葉を聞く意欲 と態度
表現	感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする	豊かな感性 創造性

幼児にとっての絵本体験は、日常生活の中では体験できないようなたくさんのことを直接、間接に体験するための方法であり、深い感動体験の積み重ねが幼児期の感性を豊かに育んでいく。また、読み聞かせによる語りのリズムや目に映る絵本の映像が柔軟な頭脳を適度に刺激して「知識」「感受性」「想像力」を育てる働きをしてくれる。

① 登場人物に着目した絵本の活用

本短大の絵本蔵書の 77.3%は登場人物が題となっている。年齢が進むにつれて、主人公が中心に話が展開する人物の心の動きをとらえることができるようになる。家庭から保育園・幼稚園と生活範囲が広がり、友だちとの関わる中で一人では気づかなかった人物を知るようになる。家族や身近な人物から地域の人々、働く人へと関心が広がってくる。また、飼育経験や見学体験によって、動物にも興味を持つようになる。

登場人物との同一化の特性は、幼児期の人格的な発達、生活習慣や態度の形成などにとって極めて重要なものである。様々な登場人物との出会いに胸を踊らせ、時空を越え夢や冒険が可能である。教師や他の友達と共に、お話の世界を間接体験しながら感動を共有し、人としてのやさしさ、思いやりなどの豊かな心や想像力などを育み、夢や冒険心を満たしていく。

発達の道筋を見通し、意図的・計画的な指導については、幼稚園教育要領解説第 1 章総説 4 計画的な環境の構成には「一人一人の幼児のかかわっている活動の各々の展開を見通すとともに、学期、年間、さらに、入園から修了までの幼稚園生活、修了後の生活という長期的な視点に立って幼児一人一人の発達の道筋を見通して現在の活動の位置づけ、幼児の経験の深まりを見通すことが大切である」⁵⁾としている。

② 基本的な生活習慣の確立に向けて

保育所保育指針には第 2 章、3 歳以上児の保育に関わるねらい及び内容には、「絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付ける。」⁶⁾とある。また、1 歳以上 3 歳未満児の保育に関わるねらい及び内容では、「身近な人に親しみをもって接し、自分の思いを言葉で伝え、言葉による伝え合いができるようになるように援助する、子ども同士の関わりでの仲立ちを行う、片言から、二語文、ごっこ遊びでのやり取りができる程度へと、大きく言葉の習得が進む時期である」⁷⁾とある。このように、幼稚園や保育所においては幼児教育の専門性を生かし、発達の道筋を見通した読み聞かせを意図的・計画的に行うことが求められる。

領域「健康」では、早寝早起き、食生活、トイレトレーニング、衣類の着脱、「人間関係」では、社会・家庭のルール、善悪の基準、あいさつ、我慢、お手伝いに関する絵本を発達段階に応じた読み聞かせを計画したい。

おわりに

幼稚園や保育所などの幼児教育における集団での読み聞かせは、絵本の楽しさを友達と一緒に味わい、友達を感じたことを刺激として受けて楽しむ。いろいろな感じ方を知り、友達と共感し、共通のイメージをもたせ、次の遊びや生活を豊かなものとしていく。

この体験がもとになり、自分自身の体験や知識、考え方を広げ、さらに、身近な人、身近な集団にととどまらず、地域、社会と共感できることにつなげることができる。

領域「言葉」は他の領域にも関連し、園の教育全体を支えるものである。また、領域「言葉」は、

小学校の教科、領域につながっている。園・小学校の接続に向けて、交流活動のみの連携に終始することなく、子どもの成長の連続性や学習指導要領に示されている目標や学習用語に着目し、読み聞かせや読みの指導が、単なる言葉の上手な使い手や読書好きに終わることなく、自分の道しるべとなるような読書活動につながることを願う。

引用

- 1) 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申) p4
- 2) 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申) p12
- 3) 小学校学習指導要領 p 16, 17
- 4) 小学校学習指導要領 p 16, 17
- 5) 光村図書
- 6) 幼稚園教育要領 第1章 総則 第2 p 3,4
- 7) 幼稚園教育要領解説 第1章 総則 4 p 39
- 8) 幼稚園教育要領解説 第1章 総則 4 p 39
- 9) 保育所保育指針 第2章 保育の内容 p45

参考文献

- 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』
『分析批評』入門「10」のものさし (教育新書)』 浜上 薫 明治図書出版 1990
『「分析批評」と表現教育 (授業への挑戦)』 井関 義久 明治図書出版 1990
『「向山型分析批評」で討論授業を組み立てる』 甲本 卓司 明治図書出版 2007